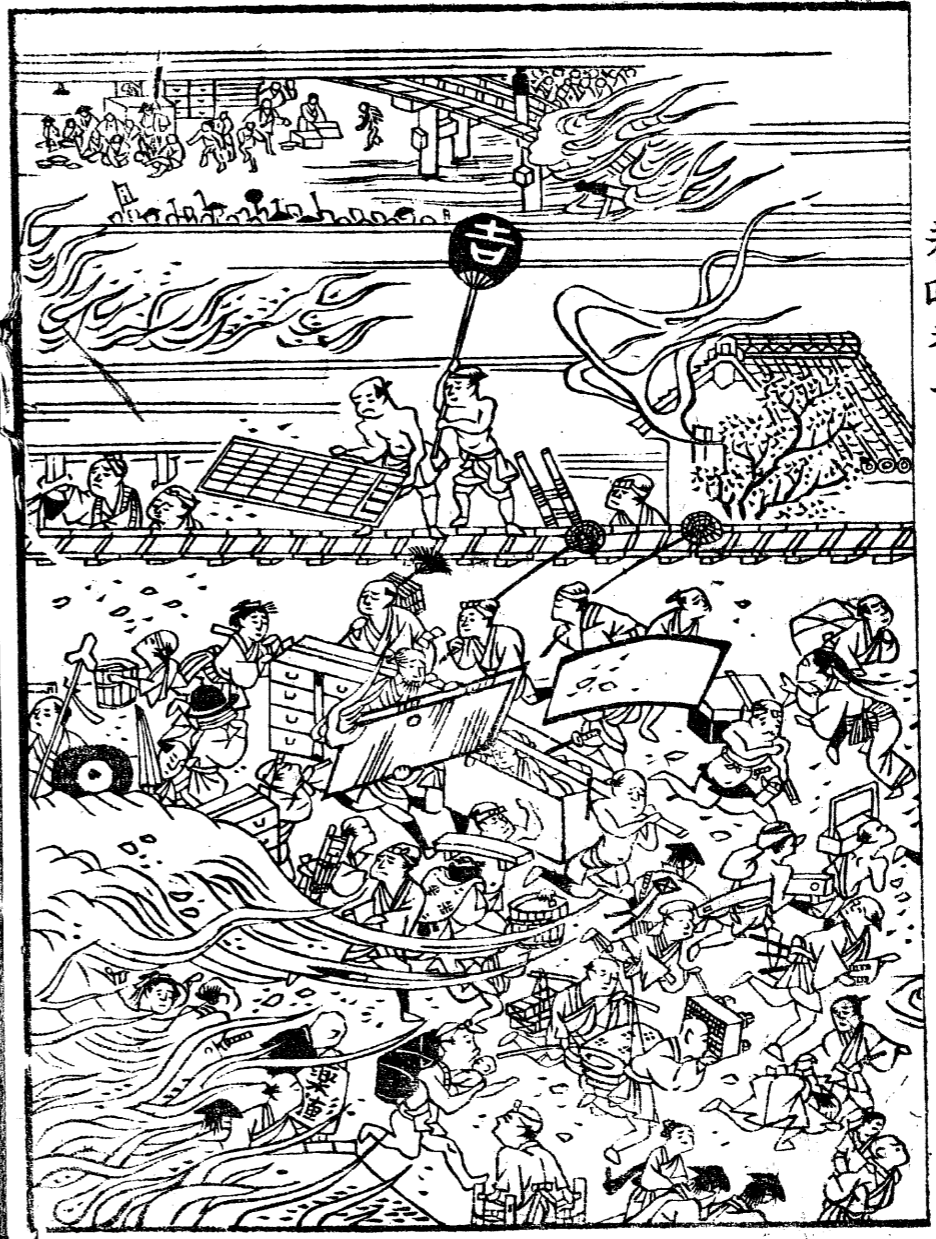


天竺山



天竺山

天竺山



天竺山



雨火観念をまじく焼く熾んに上系をさし  
 焼ゆく東の方一筋七条色の火は先よ東山の  
 方へ珠教を所相穀津殿の世宣は七条米市場  
 の山より下寺町より本谷町川系町の色は  
 桑の山より焼き中通より高倉をわ  
 たりより新町色はるくの尾は火勢は強く  
 志むくに西山をさして二條堀川の方へ焼ゆく  
 西の方れ一筋を堀川色より土佐寺ありき  
 千本通を泥りに山の方へ焼のぼりき

津屋方二系千本色の敷々の津屋方  
 焼くは焼失とと焼失のふり巻は幸に  
 紀伊の焼くると考ふは是より中島の火と一回は  
 焼のやりく西陸の焼通り山に紫那今又乃  
 津屋所焼くは焼ぬけき後又風成ま  
 の方より吹起く禁庭の津方忽あや  
 まより吹失ふま子の方へ吹起り海中海外  
 津屋の始なり津城を乃び神社仏閣所  
 焼失る方より焼くは津東頂妙乃び

其を新地二系新地の在るは焼失を依り  
 法輪寺俗小壇の焼失は焼止は  
 風勢の大方有るあはれはとくと人  
 け日の大風一定さるは一度は西一度は東或は  
 小或は南押さるる暴風は実よ狂風と  
 して一べし焼くは六ツ時石垣町が火一四又ツ時  
 因幡堂佛光寺より壬午の卯外と焼くは  
 が本國寺の焼くは晩の七ツ本願寺は  
 ハツ時焼くは風勢定りたる

津屋方

六

あるべし 乃常の出火小あはだ始終かくの如く  
されば 一度の焼跡りたりと云ふもさうぬぐ焼  
めぐり吹狂く都の地欠は跡さび灰燼とさるは  
奇怪の事小そありたり 亦山より始終は刀倉  
より一人の也 船一乃常の火のよと云ふ者り火の  
風に押さく地をまき 烟の内よりつくさそと  
よと云ふ肉忽ら二丁もあさる小又らつく  
と云ふ風のさぬみと云ふたおとさつと火のよ  
ん急しと云ふ夜の魚の刻はよりを風も

がしとぬみく 一乃火のさまのかり常れ出  
火のぞく 乃人しとくや跡小怪しりしと  
上糸の山人東南の方一應さ下糸の山人西  
吹飛く中糸の火宇宙に立登つとくさ肉は  
鞠のぞく 又山人三抱もありぬらんといふ  
火の玉風噴と揺るび方右お返に飛うけりけ  
火のさる赤鐵とぬぐりともさ 一糸の赤紙  
と焼しとく 忽ち灰燼と成しとく 又晦日  
の夜より朔日の曉に至ると 播津河内大和

和泉丹波丹後迎に若狭都く十に八里乃  
 乃火光騰結瓜深くさくさく映し月夜の  
 しく煙の光を分ちてびししく夜は分ふせと  
 晦日朔日のあるら白益に火光雲烟にうけり  
 路程二十里の外やまぐ夜はのどく入くと  
 名やくくく在る京の火消大名及び在國非番の  
 御方も追々死つた東御小奔走とといふも  
 防ぐてさ方役もさく火已に御所を小を付  
 當と各々さるる集り飛火瓜防ごく守護

一まねて夜入はほひ風雨共に到りく火勢  
 益々熾きりけ時を急ぐと始め經紳家一丈  
 折小火移るといふも防ぐてさ方役さく四  
 方の寺院に鐘をつくさ音をさ小響く  
 け鐘分つくともあな多くを土の櫃下やこも  
 地下の百姓ども廿人廿人づつ防ぐよつた  
 又水瓜汲来く釣ぐのよそくよ一桶の  
 水半の湯煙とさりく花敷いととて人衆  
 い敷の明くさく堂塔の崩る音雷の如く

ぶくにこそは〜〜をまよひびと猛火ま  
 火焼く是火刀をくりの地を満つと  
 ども魂火失ひ身のてどむあは志くは  
 畏れを踏つらふり〜〜はふらふり  
 雨のよ〜〜と〜〜く電を落し砥  
 おど〜〜怒〜〜い〜〜方〜〜か〜〜い〜〜邪  
 廣大の花繡世界只一房の夜の烟塵と化  
 上一人より下士庶の家に至はさ〜〜く遺  
 るく家秘の珍器什宝救火等〜〜焼失と

と〜〜天〜〜る〜〜か  
 拵け夜の火火の昔よりゆは〜〜か〜〜い  
 宝永の中の火の今も燃つ〜〜人〜〜怒〜〜な  
 られど糸の町十が六分り〜〜くむ〜〜應永  
 の丸の火も古火〜〜と〜〜ぬ〜〜く〜〜た〜〜れ〜〜ど  
 中〜〜け夜の大火〜〜あ〜〜び〜〜ど〜〜中昔時の名鳴ら  
 方丈の祀よ祀せば大風大火地震飢饉など  
 つ〜〜れ〜〜ま〜〜る〜〜れ〜〜が〜〜身〜〜の〜〜毛〜〜も〜〜よ〜〜ら〜〜れ〜〜る〜〜れ  
 と火ば〜〜り〜〜ら〜〜ら〜〜ら〜〜ら〜〜れ〜〜と〜〜京の内こが〜

分の焼きりとし夜の火を海の中海外に分て重  
 の焼きりと始東風より海より下系乃  
 焼付時の上系より知喜の人と馳あけあり  
 火の勢を救ひいづるなる風火  
 燭火飛しく四方に散れせし上系のこ  
 も焼きとて人後こそあはれ人々も驚き  
 ぞひくふまゝとゆりて我若所をくんぬれを  
 いのちの烟火の内に埋りれと仰りしは  
 もかたごとく性も還付も只烟火乃中

られが親子兄弟夫婦主僕もこころづく  
 哀しくも身ひとめふも道と強く右付た  
 付小進すまひ或はあまふとあはれを焼く  
 死を怖りのまぢらふ老小更のまぢら  
 仰けられく加茂川の廣場より出るといふも  
 猛火四方より礼と落れ風去勢を吹くは眼  
 々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々  
 焦熱大焦熱也外もはこれ中よりまぢら  
 小がくくあうんまぢらありとあはれ律傍

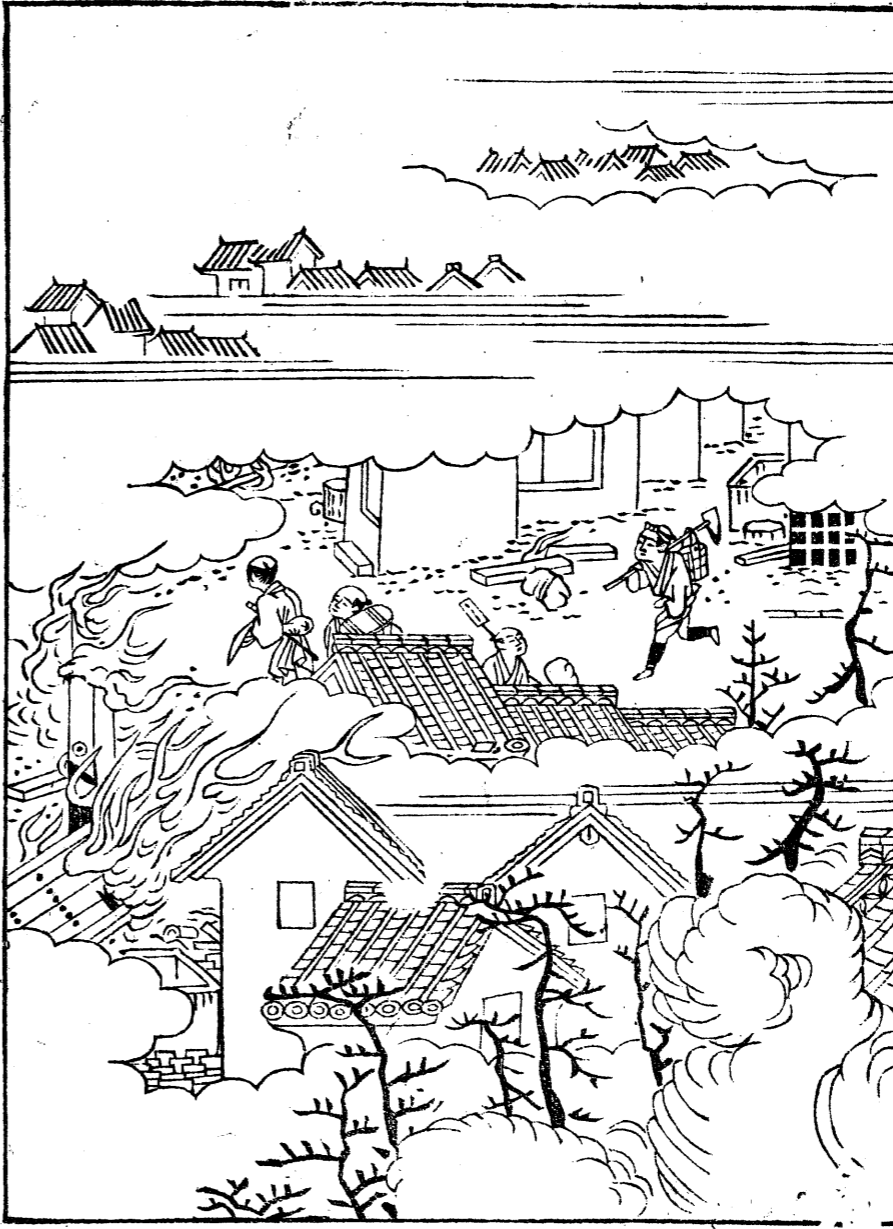
新編 源氏物語

岡崎の急いそぎよく来る舟ふねの父ちちの聲こゑがきこえ  
 とあはれと舟ふねを足あし付つくまわく〜このふたせ  
 つとゆり茶ちやよ水みづよとあひくひて御ご言ごん言ごん付つけぬ  
 後のちふんばい教しよへゆく似にたれども志こころをぬかす  
 一ひとと又また長ながるらあさるた子の乳う母ぼ子を片ひとり  
 小抱こぶこ行いくふ小船こぶねがたのぐれ〜はのすてよ  
 志こころをりたれいそ船ふねが井い戸どへ投なげぬんま  
 涙なみだぐ子の方かたが井い戸どへ投なげたれやぐ〜そ  
 身みも火ひの内うちへ飛とび入いり〜空そら〜くさりぬと









こねくや下婢とれども我と志は人といふ  
 べし又或人家内の器お一つも顧みず唯  
 父母公とまひてのぢか時あつりの人お  
 いお公のけ多人とまひめーん  
 今一ふ腰とさるん我宿よ  
 何とあしとらひおさん  
 と懐く出たりわがけおさるくおりお  
 内の相及一つも失ふとらしとそや大孝子  
 の心感しこの強公やぬるまめしと